

強者の戦略

この文章に目を通して多くの方とは画面越し又は紙面越しの付き合いになりますが、この文章を認めている私にも肉体があり、週に何度かは教壇に立って生徒と直接向き合っています。また、直接顔を合わせることはなくとも、採点官として強者を志す生徒たちと対峙することもしばしばあります。

そのためか、時折次のような質問を受けることがあります。

「実際の大学入試では、どのように採点がなされているのでしょうか。」

「分かりません。」

すげないと誹られようが、実際知らないのだから他に言いようがありません。多少長めに大学院に身を置いていた私ですが、教授たちの口から入試にまつわる話を耳にしたことはただの一度もありませんでした。それどころか、誰が入試業務に携わっているかさえ口外されることはなかったのです。

「ただ…」

興味本位ではない、真剣な問いかけであるなら、私はこう続けます。

「世間一般の記述模試で行われているような絶対評価の採点を、ひょっとしたら大学側は行っていないかもしれません」

受験は「水物」とよく言われます。定められた定員に合うように高得点者から順番に合格を出してゆくのが入試である以上、自身の手応えとは合致しない結果となることは決して珍しくありません。入学試験は、基準点を超えていれば一律合格とされる検定試験とは性質を異にするのです。たとえ手応え十分でも、相手が自身の答案以上の妙案を繰り出してくれば、自身に対する評価は相対的に低くなってしまいます。

一方、模擬試験では可能な限り客観性を担保した採点基準に基づいた評価（いわゆる絶対評価）が行われます。その評価方法が間違っているわけではありません。過去のデータの蓄積もあり、可否予測の精度は非常に高いことは周知の通りです。ただ、英語や国語のように受験者の言語能力が解答の質に大きく影響する科目では、絶対評価に限界があることもまた事実なのです。

例えば、「○○を説明せよ。」という問題を出題したとします。通常採点（絶対評価）を行うなら、解答に組み込むべきポイントを予め設定しておき、それらを幾つ満たしているかによって得点が決まることになるでしょう。ですが、特に英語や国語の場合、その組み込むべきポイントを一意的に定めることが難しい、或いは出題者側が想定していなかったポイントを指摘する答案が出てくる場合があります。もしそのような答案が出てきたなら、試験官たちはそれぞれの答案を比較検討し、より説得的な方に高い評価を与えることになるでしょう。

以上のような話をすると、多くの方が訝しんでこのように訊ねてきます。

「ですが、果たしてそのような問題が出題されることなどあるのでしょうか。」

今回は、それに対する私の回答を提示しようと思います。出題は、2002年の大阪外国語大学（現在の大阪大学外国語学部）の前期日程です。どれが件の問題かは、今は敢えて伏せておきます。自分なりの答案を用意した上で、次回の解説編に臨んで下さい。

強者の戦略

問 次の英文を読み、設問に日本語で答えよ。

As many people have noted, the start of movie-making a hundred years ago was, conveniently, (a)a double start. In that first year, 1895, two kinds of films were made, proposing two modes of what cinema could be: cinema as the transcription of real, unstaged life (the Lumière brothers) and cinema as invention, artifice, illusion, fantasy (Méliès). (b)But this was never a true opposition. For those first audiences watching the Lumière brothers' *The Arrival of a Train at La Ciotat Station*, the camera's transmission of a banal sight was a fantastic experience. Cinema began in wonder, the wonder that reality can be transcribed with such magical immediacy. All of cinema is an attempt to perpetuate and to reinvent that sense of wonder.

Everything begins with that moment, one hundred years ago, when the train pulled into the station. People took movies into themselves, just as the public cried out with excitement, actually ducked, as the train seemed to move toward *them*. Until the advent of television emptied the movie theaters, it was from a weekly visit to the cinema that you learned (or tried to learn) how to walk, to smoke, to kiss, to fight, to suffer. Movies gave you tips about how to be attractive, such as: it looks good to wear a raincoat even when it isn't raining. (c)But whatever you took home from the movies was only a part of the larger experience of losing yourself in faces, in lives that were *not* yours— which is the more inclusive form of desire embodied in the movie experience. The strongest experience was simply to surrender to, to be transported by, what was on the screen. You wanted to be kidnapped by the movie.

The first prerequisite of being kidnapped was to be overwhelmed by the physical presence of the image. And the conditions of “going to the movies” were essential to that. To see a great film only on TV isn't to have really seen that film. (d)It's not only the difference of dimensions: the superiority of the larger-than-you image in the theater to the little image on the box at home. The conditions of paying attention in a domestic space are radically disrespectful of film. Since film no longer has a standard size, home screens *can* be as big as living room or bedroom walls. But you are still in a living room or a bedroom, alone or with familiars. (e)To be kidnapped, you have to be in a movie theater, seated in the dark among anonymous strangers.

注

the Lumière brothers : リュミエール兄弟。フランスの化学者兄弟。映画撮影機、映写機を発明した映画の先駆者。

Méliès : ジョルジュ・メリエス。フランスの奇術師、映画監督。

- (a) 下線部(a)について、どのような意味において“double”なのか述べよ。
- (b) なぜ下線部(b)のように述べられているのか、理由を説明せよ。
- (c) 下線部(c)の要点を述べよ。
- (d) 下線部(d)を和訳せよ。
- (e) 下線部(e)を和訳せよ。
- (f) なぜ下線部(e)のように述べられているのか、理由を 80 字以内で説明せよ。

From: Osaka University of Foreign Studies, 2002